

超解像顕微鏡プロジェクト

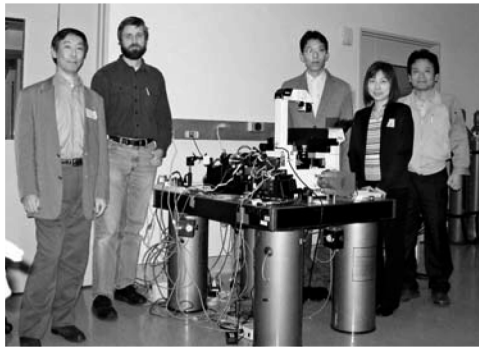
「海外出張は無理です」と公言していた。10年前、幼い三人娘を抱え慌ただしかったころだ。だから米国の大学と共同の超解像顕微鏡プロジェクトに参画しても、当初は社内での仕事だけを担当していた。

しかし、開発が進むにつれ、設計者が現地に行き、説明する必要が出てきた。戸惑いながら帰宅し、夫と娘たちの予定を確認すると、理科展覧会と遠足が出張と重なっていた。なんとと嘆く私に、「なんとかなるよ」と夫が背中を押し

凛としていきる

理系女性の挑戦

家族や周囲に恩返しを



てくれた。

理科展覧会には長女の自由研究が出品されていた。それは私も強い思い入れがある虫眼鏡と暗箱で作ったカメラだった。夫がその作品の画像や、次女の遠

足の朝には肉団子と卵

理科展覧会には長女の自由研究が出品されていた。それは私も強い思い入れがある虫眼鏡と暗箱で作ったカメラだった。夫がその作品の画像や、次女の遠

で、夫の母や実家の父

に泊まりに来てもらったり家事代行業者を頼んだりもした。未明に三女からの電話で起こされ、「ママ、早く帰ってきて」と泣かれたこともあった。一緒に泣きそうになるのをこ

超解像顕微鏡プロジェクトの進行中、上司の勧めもあり、管理職試験を受けた。そして現在14人のメンバーを統括している。課題の解決と同時に課員の成長をサポートする課長職は、設計者とは違ったやりがいがある日々だ。

家族や周囲に支えられ、自ら課した制限を越えて挑戦させてもらって今がある。これまでに培った知識や経験を力に、後輩たちをはじめ関連職場に協力することで恩返しをしていきたい。

自由研究で理科展覧会の常連だったが、現在の志望は建築学科だ。

企業協力・日本女性技術者フォーラム(JWF)

ニコン コアテクノロジー本部バイオイメーシング開発部 第一開発課長

大内 由美子



張だった。それからの約4年間は3カ月一度出張することになる。夫1人で乗り切れたのは初回だけ

それまで、会社の制度とはいえ3回も育児休暇を取得したことに、私は必要以上に引け目を感じていた。同期が徐々に管理職になるのをひとごととして眺めていた。だがこの

プロジェクトメンバーと。左から2人目は故グスタフソン教授

「プロフィール」90年お茶の水女子大学理学部物理学科卒、同年ニコン入社。以来顕微鏡の光学設計に従事。14年から現職。